

帰国報告

1. 派遣生の基本情報

氏名： 江口大輔

所属・身分：欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学研究室 PD

派遣形態：個人派遣

2. 研究テーマ

メタファーにおける指示～不可視のものへの明証性を中心に

Die Referenz in Metaphern - Die Evidenz des Unsichtbaren

3. 派遣先での活動

派遣先基本情報：ドイツ ヴュルツブルク大学 (Julius- Maximilian-Universität Würzburg)

派遣先指導教官：ヘルムート・プフォーテンハウアー退官教授

派遣期間：平成 22 年 9 月 30 日～平成 23 年 9 月 30 日

4. 主な研究成果

1) 当初の計画概要

メタファーを多用して表現される幻想的な空間もまた現実性を獲得せねばならないという、ジャン・パウル『美学入門』（1804）における要請にアクチュアリティーを認める立場から、「メタファーにおける指示」というテーマに沿って研究を進める。考察の出発点となるジャン・パウル（1763－1825）の詩的言語、および彼自身による詩論に関して考察を深めるほか、18 世紀ドイツ語圏において「指示」や「メタファー」といった概念がどのような現れ方をしているのかを調べ、今後の研究の基盤固めを行う。

2) 実際に達成された成果

留学先のヴュルツブルク大学では、いくつかの講義に出席しながら、指導教官となったヘルムート・プフォーテンハウアー退官教授がイェルグ・ロベルト教授と共同で主催するドクターコロキウムに参加し、そこでの議論に大いに刺激を受けながら研究を進めた。2010 年 11 月 11 日から 13 日にかけて、ヴュルツブルク大とミュンヘン大により共催された「ラオコーン・シンポジウム」に合わせて、コロキウムでもレッシング『ラオコーン』に関連した発表が多く行わ

れており、言語と絵画のメディア的相違というトピックの重要性を改めて知ることとなった。そして、本研究の課題を遂行するためには、言語表現と絵画表現の根本的な相違という、本研究の問題設定において前提となっている条件をまず考察の対象とせねばならないという考えに至った。言語と絵画の相違が論じられる際に、何が論点となり、そしてそれにどのような解決が与えられているのか、といった動向を知らねばならない。そこで、指導教官に指導を受けながら文献に当たることになった。

そうした中で、『ラオコーン』において否定された「詩は絵のごとく」の原則がなぜ詩学の中心的位置をそれまで占め続けることができたのかという関心から、啓蒙初期のスイスの文学理論家J・J・ブライティンガー（1701-1776）の著作の読解に着手した。そして、彼の著作のなかに本研究にとっての重要なヒントが豊富に含まれていることにすぐに気づいたため、その後の留学期間はブライティンガー研究に集中することになった。ブライティンガーの詩画同一論を支える作用美学的考察はレッシングのイリュージョン理論に引き継がれており、文学史的に重要な意義をもっている。また、言語と絵画のメディア的相違も十分に意識していたブライティンガーは、言語表現に絵画的特性を与える手段としてのメタファーを論じ、大部の著作にまとめている。さらに、文学における不可視のものの描出について、ブライティンガーは可能世界論を用いて理論的な根拠付けを試みている。本研究のテーマにとっての重要概念がことごとくブライティンガーによって論じられていることは大きな驚きであった。

ブライティンガーの詩論における作用美学的な枠組みや、「驚異的なもの」や「真実らしさ」といった概念は、後の文学や美学の理論的展開に鑑みて重要な意味をもっている。ドクターコロキウムでの発表では「ブライティンガー『批判的詩論における真実らしさの概念』というテーマで発表を行い、他の参加者から貴重な意見と励ましを受けた。

3) 今後の研究展望

今後は、博士課程まで専門としてきたジャン・パウルの研究を継続しながら、ブライティンガーを中心とした初期啓蒙の研究も平行して進めていく。ブライティンガーとジャン・パウルの主要な活動期間には半世紀以上の隔りがあり、その半世紀こそまさにドイツ語圏文学が隆盛を誇った時期にあたる。バロックから啓蒙主義への移行期にいたブライティンガーと、啓蒙主義からロマン派の境にいたジャン・パウルをそれぞれ始点と終点とし、啓蒙主義の内部における歴史的な経過を視野にいれて、「指示」と「メタファー」の概念についての考察を進めていきたい。

18世紀後半のドイツ語圏の文学および美学の展開を用意した重要な時期として初期啓蒙を見る、という視座を得られたことは、今後の研究活動の展望を広げる非常に貴重な経験であると感じている。